

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02275

研究課題名(和文) 中・近世書論を基盤とする「日本書論史」の構築

研究課題名(英文) The construction of "A History of Japanese Calligraphic Theories" based on Japanese Calligraphic Theories in the Middle and Early-Modern Ages

研究代表者

永由 徳夫 (NAGAYOSHI, Norio)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：30557434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「日本書論史」の構築を試みるものである。日本書論を書論史の視点から眺めると、平安時代初期の「書論の萌芽」、平安時代末期から南北朝時代にかけての「入木道書論の成立」、江戸時代の「唐様書論の隆盛」、の三期に大きな特徴が見られる。本研究では、1. 世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化 2. 中古・中世書論と近世書論の連関 3. 近世書論における和様書論と唐様書論との関係性、の諸課題に取り組むことで、「日本人の美意識とは如何なるものであるか」という観点より、新たに「日本書論史」を樹立する契機となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化を行うことで、「日本書論」の特性とされてきた書式故実を述べた秘伝書としての性質がどのように形成されていったのかを明らかにした。また、藤原伊行の書論『夜鶴庭訓抄』の記述内容と伊行の自筆遺品「葦手下絵和漢朗詠集」の書写態度とを照らし、そこに関連性が見られることを指摘した。さらに、今日の書学領域では常識となっている「書聖・王羲之」は、書論の積み重ねによって形成されたものであると結論付けた。本研究の成果が「日本書論史」構築の契機となったことの意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This study tries to construct "A History of Japanese Calligraphic Theories." When observed from the perspective of the history of calligraphic theories, calligraphic theories in Japan have three distinctive periods: "the origin of calligraphic theories" in the early Heian period, "establishment of the Jubokudo theory" from the late Heian to the Nanbokucho period, and "a prosperity of the Karayo theory" in the Edo period. Three themes are identified: 1. Systematization of the calligraphic theories in the Mid-Ancient / Middle ages mainly based on the ones by the Sesonji family, 2. Relevance between the calligraphic theories in the Mid-Ancient / Middle ages and that in the Early-Modern age, 3. Relationship between the theories of Wayo and Karayo in the Early-Modern age. This research also shows us what the Japanese sense of the beauty is and gives us an opportunity to construct a new view of "A History of Japanese Calligraphic Theories."

研究分野：書論、書道史

キーワード：書論 唐様書論 和様書論 書道史 芸術学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中・近世書論(書道理論)を基盤として、「日本書論史」という新たな学問分野の構築をめざすものである。しかしながら、かねて日本書論研究に対する背景としては、日本書論は書式故実を述べた秘伝書に過ぎないという固着化した捉え方が一般的であった。それに対し、研究者は平成23年度～26年度にかけて、科研費・基盤研究(C)「中世書論に基づく日本書道史の再構築」(課題番号:23520152)という課題に取り組み、日本書論は必ずしも秘伝書の一語では括り得ない汎用性を指摘した。日本書論の嚆矢である世尊寺家六代目・藤原伊行(?～1139～1175)の著した『夜鶴庭訓抄』(1165年頃成立)を中心に、その独創性を明らかにし、日本書論研究を基盤として日本書道史を再構築する必要性について論じた。

これにより、以前に比べれば日本書論の意義については周知されるようになったが、「日本書論史」という全体を俯瞰する研究は行われていない状況である。日本書論に基づき、日本書道史を再考し、新たに「日本書論史」を樹立することは喫緊且つ重要な課題である。

2. 研究の目的

(1)「日本書論史」の構築

本研究は、中・近世の書論を基盤として、新たに「日本書論史」を構築することを目的とする。未だ「日本書論」を通史として研究したものは見られず、新領域の研究となる。

「日本書論」を「書論史」の視点から眺めると、平安時代初期の「書論の萌芽」、平安時代末期から南北朝時代にかけての「入木道書論の成立」、江戸時代の「唐様書論の隆盛」、の三期に大きな特徴が見られる。これを踏まえ、以下三点の課題を設定し、「日本書論」の特徴を精査する。

- ① 世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化
中古・中世書論と近世書論の連関
近世書論における和様書論と唐様書論との関係性
各テーマを関連付けながら「日本書論史」を構築していく。

(2)「日本書論」の特性

「日本書論史」研究を進めていく過程で、「日本書論」の特性を明らかにする。近世書論は流儀書道の保持を念頭に置く和様書論と中国書論を摂取した唐様書論とに大別されるが、両者の関係についてはこれまで言及されていない。そもそも和様書論、唐様書論の謂いは研究者独自の観点である。近世の公用書体「御家流」は中世書論『入木抄』を著した尊円親王の流れを汲む和様書であるが、儒者・文人等知識層においては唐様書が好まれた。果たして和様書論と唐様書論における交流はなかったのか、「連関と対峙」の視点から検証したい。本研究では「日本人の美意識とは如何なるものであるか」という観点より、新たな学問分野「日本書論史」を樹立することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 基本的資料の収集・整理

研究に臨むにあたり、日本書論に関する各種資料を収集し、整理する。

まず、平成29年度は、科研費・基盤研究(C)「中世書論に基づく日本書道史の再構築」(平成23年度～26年度 課題番号:23520152)の成果を踏まえ、中古・中世書論に関する研究を行う。公益財団法人無窮会蔵の『夜鶴庭訓』の翻刻を行い、中世書論が近世においてどのように受容されたかを検証する。

平成30年度はこれを受け、世尊寺家八代目・藤原行能著『夜鶴書札抄』、同九代目・藤原経朝著『心底抄』の研究に取り組み、中古・中世書論の特質を明らかにしていく。

令和元年度は、近世書論の特性を明らかにするために、訓読・訳出等、基礎的な研究を継続する。近世書論の主要眼目となる「書聖・王羲之」に焦点を当て、「日本書論」と「中国書論」の関係性について精査する。

研究期間を通じて、大学図書館・国会図書館・専門図書館・博物館・美術館等で調査・研究を行い、学会・研究会に積極的に参加して知見を広める。研究期間中に幾編かの論文を執筆し、研究誌・紀要等に成果を公表する。また、最終年度には学会発表も行う。

(2)『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『心底抄』等の翻刻

平成29年度・30年度にかけて、世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化について研究を行う。公益財団法人無窮会蔵の『夜鶴庭訓』『夜鶴書札抄』及び架蔵の『心底抄』の翻刻作業を進める。その作業を通じて、「日本書論」の特性とされてきた秘伝書としての性質がどのように形成されていったのかを明らかにする。

(3) 能書と遺墨の研究

日本書道史においては、爾来伝称筆者として古筆・墨跡等の筆者を仮託する。それを裏付ける根拠となったのが、各種書論である。これは単なる能書への仮託に止まらず、往時の人々の美意識による願望が表出された結果でもある。今日の書道辞典類ではなく、当時の書論によって、能書伝を編み直すことは意義のあることである。また、藤原伊行は書論『夜鶴庭訓抄』を著すとともに遺墨「葦手下絵和漢朗詠集」(京都国立博物館蔵)を残している。書論で著述していることが、実作にどのように反映しているか、国文学研究において最善本とされる「粘葉本和漢朗詠集」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)との比較を通じ、その特質を明らかにする。

(4) 近世書論における「書聖・王羲之」の形成

王羲之を「書聖」として尊崇することは、書学領域においてはもはや常識となっているが、日本・中国の大型辞典類では、「書聖」の語を王羲之に特定してはいない。王羲之が「書聖」として、その揺るぎない地位を確固たるものとしたのは、日本書論の積み重なりによる結果である、という仮説を立て、訓読・訳出等、基礎的な研究を継続しながら証明する。

4. 研究成果

(1) 『夜鶴庭訓抄』『夜鶴書札抄』『心底抄』等の翻刻による中古・中世書論の体系化

平成29年度・30年度にかけて、公益財団法人無窮会蔵の『夜鶴庭訓』『夜鶴書札抄』及び架蔵の『心底抄』の翻刻作業を進めた。世尊寺家六代目・藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』には十数種の写本が伝わっているが、無窮会蔵『夜鶴庭訓』を翻刻する中で、以下のことが明らかになった。諸本の中で、無窮会本のみが漢文体で記されていること、また、無窮会本の内容は諸本と異なり、書式故実の特化した内容になっていること、にもかかわらず「秘説」の謂いは見られないこと、等々である。また、本文の中に、九代目・経朝の名が見えることから、後人の著であることは疑いが無く、世尊寺家書論の変遷過程が窺える。

これまで、世尊寺家八代目・藤原行能著『夜鶴書札抄』は、『夜鶴庭訓抄』を祖本とするものと見做されてきたが、翻刻を通じ、両書の相違について言及し、世尊寺家書論の平明化という『夜鶴書札抄』の果たした役割を明らかにした。世尊寺家累代の書論の中で、『夜鶴書札抄』を一つの核として捉えたことは、本研究の成果の一つである。本書は、日本書論の嚆矢である『夜鶴庭訓抄』を踏まえたものではあるが、より自由闊達な態度が見られることを指摘した。

これに対し、九代目・藤原経朝著『心底抄』は、書式故実の列挙にとどまり、同家書論の形式化を実感させる。日本書論に対する「書式故実を述べ、家の書を論ずるに止まる秘事相伝の書」といった固定概念は、『心底抄』以降の形骸化に主たる要因があるのではないかと推論し、本来、中古・中世書論はもっと鷹揚な視点を有していたことを論述した。

世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化を行うことで、「日本書論」の特性とされてきた秘伝書としての性質がどのように形成されていったのかを明らかにした。

[雑誌論文]

「無窮会本『夜鶴庭訓』の研究」を執筆した(『東洋文化』第115号, 2-13頁, 2018)

「日本書論史序説 世尊寺家書論の体系化への試み」(『書学書道史研究』第28号, 29-42頁, 2018)

(2) 「書論」と「遺墨」の関連性

世尊寺家の書論を中心とする中古・中世書論の体系化を研究する上で、当時の能書の事績を明らかにすることは必須である。これは、科研費・基盤研究(C)「中世書論に基づく日本書道史の再構築」(平成23年度~26年度 課題番号:23520152)から継続する研究である。今日の書道辞典の類に拠らず、古書論より能書の事績及び人物像を明らかにした点に意義がある。

また、藤原伊行は書論『夜鶴庭訓抄』を著すとともに遺墨「葦手下絵和漢朗詠集」(京都国立博物館蔵)を書写しており、『和漢朗詠集』研究においても大きな足跡を残している。書論で著述されていることが、実作にどのように反映しているか、『夜鶴庭訓抄』と伊行の自筆遺品である「葦手下絵和漢朗詠集」との関係に着目して調査を行った。今日、国文学研究において最善本とされる「粘葉本和漢朗詠集」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)との比較を行い、「葦手下絵和漢朗詠集」の特徴を詳らかにするとともに、伊行の書論は、理論と実践の双方向の視点によって成立し得たことを明らかにした。

本調査を通じ、書論と遺墨との関連性を示すことが出来、研究課題の一つである「世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化」を解明する契機となった。

[雑誌論文]

「日本能書列伝(二) 日本古書論を典拠として」(『群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』第67巻, 23-33頁, 2018)

「『葦手下絵和漢朗詠集』の研究(基礎資料編1)」(『群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』第68巻, 25-38頁, 2019)

(3) 日本書論から見る王羲之 書聖 考

近世書論は和様書論・唐様書論に大別されるが、両者に共通するのは、王羲之に対する尊崇の念である。王羲之を 書聖 として尊崇することは、書学領域においてはもはや常識となっているが、「書聖」の語は、『大漢和辞典』には「能書を褒めていふ詞。書道に傑出した人。」、『漢語大詞典』には「指造詣最高の書道家。」とあるのみで、少なくとも日中の大型辞典類では、王羲之に特定してはいない。そこで、いつから、また何によって、王羲之は 書聖 として喧伝され、揺るぎないものとして定着していったのか、ということについて研究した。

近世書論において、殊に唐様書論は、中国書論の精粹を摂取し、浸透させることで、我が国における書芸術観を樹立する基盤となった。王羲之が 書聖 として、その揺るぎない地位を確固たるものとしたのは、日本書論の積み重なりによる結果である、という仮説を立てて検証した。

『晋書』王羲之伝では「古今之冠」と称賛し、唐・李嗣真『書後品』には「可謂書之聖也」と見える。時代ははるか清まで下り、朱履貞『書学要』に「夫右軍書聖也」とあるのが、直截的な 書聖 の初出であるとされている。我が国では、『米庵墨談』(1812)に「至右軍入聖」、外岡北海『書学大槩執筆』(1824)に「書ノ聖トモイフ右軍ニ」、大夢狂人『小學吟嚙』(1826)に「古今の書聖」と見えた後、武田司馬『書学鑒要』(1850)に「山陰父子ヲ書聖ト云モ」とあるのが 書聖 の謂いの初出ではないかと考えられる。 書聖 の語のルーツを辿ることで、 書聖 としての王羲之がどのように形成され、普遍化していったのかを詳らかにし、書論の果たした役割を明確に示した。

〔学会発表〕

「日本書論から見る王羲之 書聖 考」(第30回書学書道史学会大会, 2019年10月27日, 東京国立博物館)

(4) 総括ならびに今後の展望

本研究「中・近世書論を基盤とする「日本書論史」の構築」は、平成23年度~26年度における科研費基盤研究(C)「中世書論に基づく日本書道史の再構築」(課題番号23520152)を基礎として、さらにその発展的な研究として位置付けられる。

本研究では、以下に列挙する三点について、成果を上げた。まず、世尊寺家書論を中心とする中古・中世書論の体系化を行うことで、「日本書論」の特性とされてきた書式故実を述べた秘伝書としての性質がどのように形成されていったのかを明らかにした。また、藤原伊行の書論『夜鶴庭訓抄』の記述内容と伊行の自筆遺品「葦手下絵和漢朗詠集」の書写態度とを照らし、そこに関連性が見られることを指摘した。さらに、近世書論を精読し、今日の書学領域では常識となっている「書聖・王羲之」は、書論の積み重なりによって形成されたものであると結論付けた。本研究によって、「日本書論史」構築の契機となったことの意義は大きい。

今後は近世書論に着目し、流儀書道の保持を念頭に置く 和様書論 と中国書論を摂取した 唐様書論 との関係性を明らかにし、「日本人の美意識とは如何なるものであるか」という観点より、新たな学問分野「日本書論史」をより重厚なものとしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 永由 徳夫	4. 巻 28
2. 論文標題 日本書論史序説 世尊寺家書論の体系化への試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永由 徳夫	4. 巻 68
2. 論文標題 『葦手下絵和漢朗詠集』の研究（基礎資料編1）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永由 徳夫	4. 巻 67
2. 論文標題 日本能書列伝（二） 日本古書論を典拠として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	6. 最初と最後の頁 23 - 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永由 徳夫	4. 巻 69
2. 論文標題 『葦手下絵和漢朗詠集』の研究（基礎資料編2）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永由 徳夫	4. 巻 115
2. 論文標題 無窮会本『夜鶴庭訓』の研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 永由 徳夫
2. 発表標題 日本書論から見る王羲之 書聖 考
3. 学会等名 書学書道史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考